

【渡辺雲僊】

(その五)

◆「厳島神社」のある絵馬について

◆ 作品供覧

山崎達夫

◆「厳島神社」の絵馬について

《絵馬とは》

絵馬は祈願または報謝のしるしとして、神社に奉納された。神は人間界に降臨する際馬に乗って来るとされ、昔は生馬が神社に奉納された。しかし、生馬では飼育などに手間がかかるため、木馬、板馬、板絵へと変遷していった。昔、厳島神社を訪れた際、回廊入口の近くに神馬の小屋があり、白馬が飼われていたことを思い出す。

《厳島神社の絵馬》

厳島神社には昔から多くの絵馬が掲げられ、本社、客神社、拝殿、東西回廊に掲げられた数は数百枚ともいわれ、絵馬の数は他社の比ではなかった。現在でも一七〇枚ほど残ってい

るようだ。昔から、一度掲げて梁から落ちた絵馬は、再び掲げずと言われていたので、奉納された絵馬の数が数百枚といわれているのも理解できる。

実は、厳島神社に奉納された絵馬のなかに、【渡辺雲僊】が画いた尾崎神社の絵馬「釣鐘弁慶」の原画とおぼしき絵馬（図1）があり、現在厳島神社の千畳閣に掲げてある。この

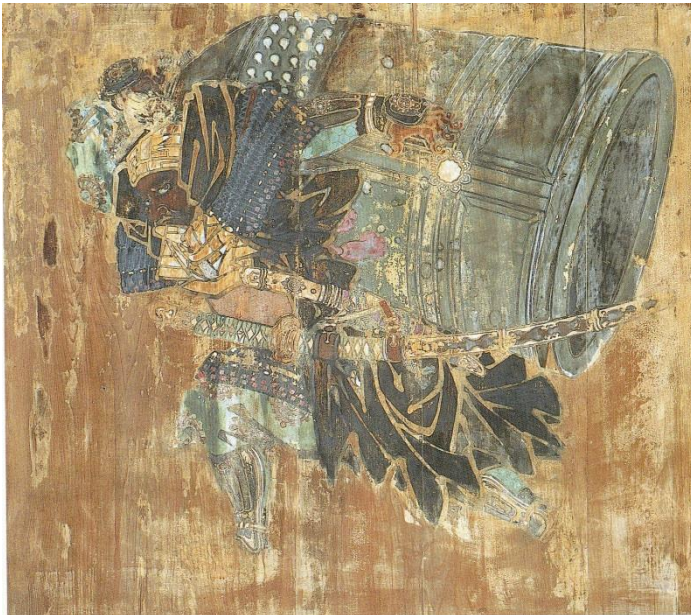


図1 「釣鐘を負う弁慶の図」
『厳島平成絵馬鑑』から引用

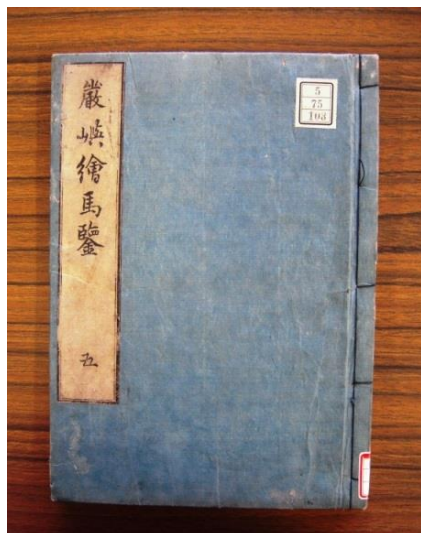
「釣鐘を負う弁慶の図」の絵馬の作者は、山野峻峰斎（藤原俊芳）であり、文政九年（一八二六）寺西主忠が奉納した。

また、尾崎神社の絵馬「山姥」（作者不明）の原画とおぼしき絵馬（図2）も厳島神社に奉納されている。この「山姥の図」の絵馬の作者は長沢芦雪であり、寛政九年（一七九七）三国屋栄次郎らによって奉納された。現在、県の重要文化財に指定されている。



図2 「山姥の図」
『厳島平成絵馬鑑』から引用

《厳島絵馬鑑（五巻）》



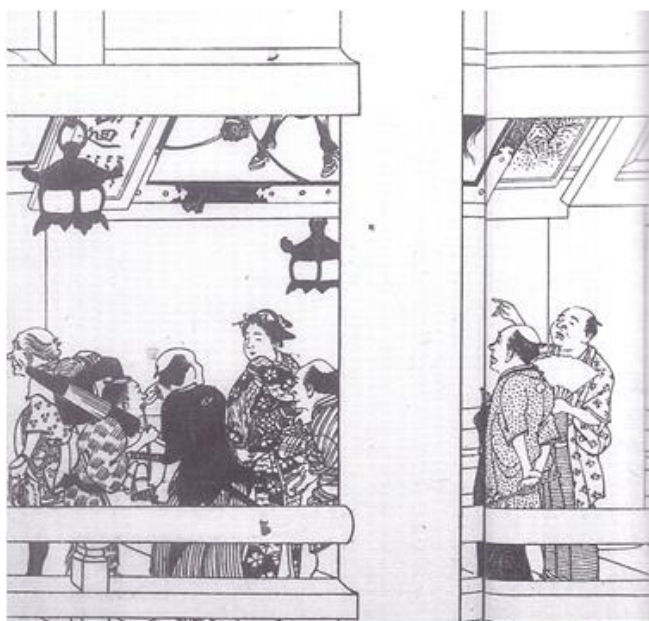
編著 千歳園藤彦 一八三二（天保三）

この本は社殿回廊に掲げられた絵馬のうち約七〇の絵馬を克明に模写して解説を加えた木版刷りの和本である。経年的に劣化してゆく絵馬を記録して残し、広く世の人と共に楽しむために発行されたものです。このなかに山野峻峰斎（藤原俊芳）の「釣鐘を負う弁慶の図」の絵馬を模写したものがある（図3）模写したのは渡辺対岳という芸陽の地方画家である。当時から絵馬の劣化を懸念し、後世にその作品を伝えるため、また、実際に厳島神社に出かけなくても奉納された

絵馬の図柄がわかるように刊行されたようである。当時の人々は、この「厳島絵馬鑑」や「厳島絵馬帳」などに記載されている絵馬の図柄や解説を見て、厳島神社に掲げられていた多くの絵馬を楽しんだ。当時は社殿のみならず東西回廊に



図3



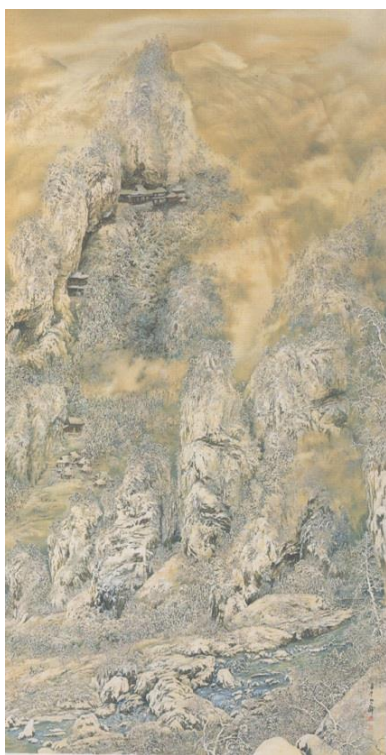
絵馬を見る図 「厳島図絵」巻一
(天保六年一八三五)

も絵馬が掲げられ、それを見に行く楽しみがあったようだ。
(図4)
尾崎神社にも多くの絵馬が奉納されているので、参拝の際にはぜひとも目をむけていただきたい。

図4 『厳島平成絵馬鑑』から引用

◆作品供覧

《羅漢寺白光》 大分市美術館



《耶馬溪錦豊》 大分市美術館



●解説 — 大分市美術館 近代日本画の状況より

彼の作品がこの二作品はともに昭和十一年頃の製作と推定されるが両者とも、樹木の枝葉から奇岩の岩肌に至るまで、画面の隅々までとことん描きこむ細密描写により表現されている。

個々の捉え方は立体的に、写生的になされているが、画面構成、画題の設定等にかんしては、あきらかに典型的な南画といえる。細密な写生描写による山水画、ともいうべき珍しい作風が展開されている。

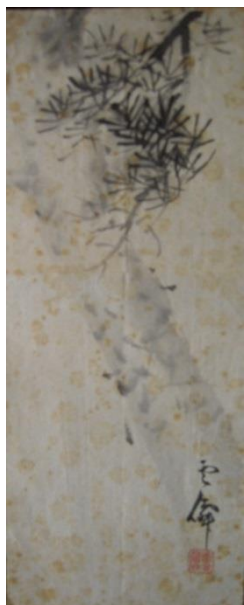
山水を独特に展開させた近代の作家に、山本春挙、結城素明といった作家があげられるが、彼らの作品では、空間構成という点に関しては山水だけでなく風景といった意識も窺われていた。しかし本作の場合、そういった意識は希薄となつている。その意味では雲儼は、いわゆる新派の立場ではなく、旧派の立場で新しい表現方法を取り入れたのであつて、この二作はこれまであまり明白になつていない、旧派系の作家たちの近代化を知る上で、貴重な作品であるともいえる。



《 狸 》



《 枇杷 》



※作品供覧については一部橋本家の協力をえました

○本誌に掲載の場と多くの助言を頂いた楠精洲会長に感謝します

○参考資料 記載内容の多くは『巖島平成絵馬鑑』を参考にした

○筆者紹介

- ・『巖島平成絵馬鑑』原田佳子 平成一五年
- ・『巖島絵馬鑑』（巻五）千歳園藤彦 天保三年
- ・祖父、父ともに昭和三三年まで矢野町砂原で開業
- ・昭和二五年矢野町砂原で出生 菊水幼稚園第一回卒園